

# 円仁『在唐記』の諸本

住 谷 芳 幸

文化創造学部文化創造学科

(二〇〇七年十一月一日受理)

## On the Different Texts of Emin's Zaitōki

Faculty of Cultural Development, Department of Cultural Development,

SUMIYA Yoshiyuki

(Received November 1, 2007)

### 一 円仁『在唐記』について

慈覚大師円仁の著述とされる『在唐記』は、『大日本仏教全書悉曇具書』中に活字化されている。また、『日本大蔵経天台宗密教章疏一』中では、『在唐決』として活字化されている。この活字化された『在唐記』(『在唐決』)は、三つの異なった内容を合わせたものであり、中間の部分に梵字の字母積がある。この字母積末尾には、「随南天寶月三藏學得」とあることから、円仁が中国において宝月三藏より学んだ梵字の発音等を記録したものと考えられている。また、この字母積中では梵字に対し、「本郷我字音」「大唐沙字音」等を対応させ、その音を示している。そのため、この字母積は橋本進吉が「波行子音の変遷について」(『岡倉先生記念論文集』、一九二八年)で平安時代の音韻資料として使用して以来、日本語の研究を

目的として、しばしば利用されてきた。ただし、しばしば利用されているものの正しく理解されているとは言い難いところもある。たとえば、ある日本語研究事典には、「慈覚大師円仁の『在唐記』のように悉曇の発音について述べた書物も著されている」という記載がある。これでは、円仁『在唐記』全体が悉曇(梵字)の発音について述べた書物であるかのような誤解を与えかねない。もちろん、これは円仁『在唐記』の字母積を利用した日本語の研究者が、字母積の部分のみを強調しすぎたことも、そのような誤解を与える原因のひとつではあろう。

ところで、以上では『在唐記』を円仁の著述としてきた。しかしながら、これについては古くから問題とされている。たとえば、観山文庫(生源寺)蔵『在唐訣』には、次のようにある。なお、題名としては『在唐訣』であるが、内容としては円仁『在唐記』と同一

である。以下での引用では訓点等は略す。また、梵字はローマ字に改めた。

(一八丁表)

享保十八年癸丑十二月十三日

如鑑

妙巖亮範

東寺演奥抄中引云慈覺在唐記文辞全同於此書矣但此書中注云已上證供奉或智證在唐記亦未可知也而此書多是建立護摩軌之秘訣而實警中明珠者也今私加校點後賢者宜知此意云  
寛政七年二月十七日 亮雄敬記

(中略)

(一八丁裏)

右一卷者吾祖慈覺大師在於大唐所記秘訣而未字相承以為笈中秘書然而書中注證供奉先輩花山雄公曰或智證在唐記亦未可知也今謂似此說未盡所以者何此書多是建立 hōma 軌之秘訣也如彼軌者法全和尚撰集而大師錄外將來而軌中深義稍難通曉者親諮二詢彼門下者則師資之常軌況乎傳法大阿闍梨乎何為僅以有證供奉三字輒是付於智證所訣可哉此則所以余云未盡意在于斯矣偶々如有今注三字者後人誤加可將書字展轉不可得知也遂寫功之日聊記片言俟來者是正云尔

癸亥六月廿九日 金剛佛子亮海再記

『在唐記』が、三つの異なつた内容を合わせたものであることはすでに述べた。なお、以下では、この三つの異なつた部分をそれぞれ前半部、中間部、後半部と呼ぶ。

さて、一八丁表では亮雄が、前半部の末尾に「已上證供奉」とあるところから、『在唐記』を智證大師円珍の作かと疑つていのである。そして、一八丁裏では亮海が、「證供奉三字」を「後人誤加」とするものの確証があるわけではない。

なお、写本によつては、前半部末尾の「已上證供奉」を「已上證供奉」とするものもある。

ところで、智證大師円珍の著述とされる『大師在唐時記』が現存している。『大日本仏教全書悉曇具書』中の円仁『在唐記』と『大日本仏教全書智證大師全集第四』中の円珍『大師在唐時記』とを比較すると、円珍『大師在唐時記』は円仁『在唐記』の前半部とほぼ一致する。ただし、円珍『大師在唐時記』の巻頭の十一行分が円仁『在唐記』の前半部では欠落していることが、大きな違いとなっている。

さて、『日本大蔵経天台宗密教草疏一』中の円珍『大師在唐時記』には大通寺本の奥書が付されている。それは次のようになっている。

一校了

元暦元年十一月十二日巳時許書了

此書智證大師入唐受法記也。但傳教大師入唐傳受記同之。彼傳教記奥在別事。自餘此兩大師記同之物也。可尋可尋。又端二十行之文傳教記無之。

嘉暦四年五月之比書寫之一校了

慈醫院

榮海

(中略)

寛政癸丑夏六月二十八日起午至夜半書寫并一校了原本乃五智山所藏也

沙門僧牛於槇尾山識

嘉暦四年にこの本を書写した栄海の奥書によれば、智證大師円珍の「入唐受法記」と伝教大師最澄の「入唐傳受記」とがあつたことになる。そして、最澄の「入唐傳受記」は、円珍の「入唐受法記」と比較すると、最澄の「入唐傳受記」では、「端二十行」が欠けており、後半部分に「別事」が追加されていることになる。この「端二十行之文」が、前に述べた円仁『在唐記』で欠落している円珍『大師在唐時記』の巻頭十一行であるとすれば、最澄の「入唐傳受記」とされたものが、現在の円仁『在唐記』と考えられよう。すなわち、栄海は現在の円仁『在唐記』を最澄の作と考えていることになる。ところで、寛政癸丑(寛政五年)に、この『大師在唐時記』を書写した沙門僧牛は、円仁『在唐記』も書写している。『日本大蔵経天台宗密教章疏一』中の『在唐決』には、大通寺本の奥書が追加され、それは次のようになっている。

右所寫在唐記二卷智證大師慈覺大師各有一卷者五智山庫本耳而

古記所傳各有五卷與今大異且記中二記全同但前

後小異不知其是非重得善本以正眞偽矣

寛政五癸丑夏六月於槇尾山記

沙門 僧牛

この二つの奥書によれば、沙門僧牛は寛政五年六月に、円珍『大師在唐時記』と円仁『在唐記』とを書写したことがわかる。さらに、この奥書によれば、「古記所傳」では五巻の「在唐記」があり、それらは「大異」であつた。ただし、そのうち二巻は「全同」であるが「前後小異」であるとす。そして、その二巻が「智證大師慈覺大師各有一巻」であるとするのである。とすれば、栄海のいう「傳教大師入唐傳受記」は、沙門僧牛の写した現在の円仁『在唐記』を指すものと思われる。すなわち、栄海が最澄の作と考えた『在唐記』を、沙門僧牛は円仁の作としてしていることになる。栄海は、五巻の在唐記の中に最澄のものもあつたため、円仁『在唐記』を最澄の作と考えたものであろうか。あるいは、文中に「已上證供奉」ではなく「已上澄供奉」とあつたため、最澄の作と考えたものであろうか。とりあえず、栄海のいう「傳教大師入唐傳受記」は、現在の円仁『在唐記』であろう。とすれば、嘉暦四年(一三二九年)には、現在と同じ構成で円仁『在唐記』が存在したと考えられるのである。円仁『在唐記』中間部の字母釈の部分には、前に述べたように、末尾に「隨南天寶月三藏學得」とあり、円仁によるものである。また石山寺所蔵の淳祐自筆の『悉曇字母』にも、この字母釈が含まれており、末尾に「圓仁記」とある。以上からも、この字母釈が円仁によるものであることは確実である。

なお、佐伯有清『人物叢書円仁』(吉川弘文館 一九八九年)で

は、「円仁の悉曇学に関する著作には、上述したように『悉曇記』一卷がある。円仁の悉曇求得の成果は、『在唐記』に収められている記述によって知られる。」(二五〇頁)と述べる。確かに、悉曇具書目録等に円仁作として、『悉曇記』を載せる。しかし、『悉曇記』自体が現存するかどうかは不明である。『人物叢書円仁』でも、『在唐記』字母釈の記載を『悉曇記』からの引用と推定しているものであろう。

『在唐記』後半部について、『人物叢書円仁』では、『大日経』第十一巻の「阿字」に関する文を引用したうえで、「惟謹供養云」とあるのも惟謹の説を述べているのであって、『在唐記』のこの部分も円仁の記述にかかわっていることが察せられるのである。」(一七九頁)とする。

ところで、『<sup>注</sup>解悉曇学書選集第一巻』(勉誠社、一九八五年)では、「かりとし一帖 全六丁 平安末期写」として比叡山無動寺蔵の円仁『在唐記』を載せる。この『在唐記』は字母釈のみであり、これが本来の『在唐記』であれば、「悉曇の発音について述べた書物」といえるであろう。

## 二 円仁『在唐記』の諸本

前に述べたように、円仁『在唐記』それ自体には、様々な問題がありそうに思われる。そのため、円仁『在唐記』諸本の調査を行った。思いがけない発見はなかったものの、従来報告されていないことが判明した。ただし、詳細な比較検討は行えなかったため、各本の先後関係は必ずしも明確にできてはいない。しかし、ある程度のグループ分けは可能となった。以下では、それらのグループに分け、

各本を紹介したい。また、それぞれのグループを仮にA本からG本までとした。

### A本

叡山文庫(真如蔵)蔵

縦 一七・〇厘

横 一四・九厘

仮綴

二六紙

外題 在唐記 慈覺大師記

内題 在唐記 前唐院 堯真

慈覺大師撰

叡山文庫の目録カードには、「(外)前唐院在唐記」(原本横書き)とある。しかし、表紙を見ると文字が書かれていたとは思えない。あるいは、題簽が落ちたようでもない。おそらく、内題の「在唐記前唐院」を誤って記入したものであろう。現存する円仁『在唐記』の諸本には、題名を『前唐院在唐記』とするものはない。『国書総目録』では『在唐記』の別名を『前唐院在唐記』とするが、おそらく叡山文庫の目録カードの、「(外)前唐院在唐記」の記載によったものである。そのため、別名の『前唐院在唐記』は誤りであろう。なお、『<sup>注</sup>解悉曇学書選集第一巻』で「かりとし一帖 全六丁 平安末期写」とされた比叡山無動寺蔵本が本書であろう。とすると、この『在唐記』も現在の円仁『在唐記』と同じ構成であり、字母釈のみの書ではない。

B本

1 龍谷大学附属図書館蔵

縦 一三・二纏

横 一五・七纏

二四紙

外題 在唐記

内題 在唐記 慈覺大師

(二丁表)

惟圭私考

秘蔵記果抄本<sup>二</sup>百<sup>三</sup>同三十九葉左

慈覺在唐記云<sup>ウ</sup>面北<sup>ニシテ</sup>交<sup>ラ</sup>

演奥鈔卷五之二十四<sup>右</sup>慈覺在唐<sup>ノ</sup>記<sup>ニ</sup>云良<sup>ト</sup>日<sup>ト</sup>者謂甘露

日

同六<sup>右</sup>未考同七十二<sup>左</sup>帛<sup>左</sup>長跪同七<sup>右</sup>連誦

齋然等<sup>ノ</sup>有<sup>之</sup>

智證在唐記有洛中五智山及<sup>ヒ</sup>河沙妙觀師

秘教録在唐所餘決一

(奥書)

(二四丁裏)

寶巖大徳云此<sup>ノ</sup>本從山門某院來<sup>ル</sup>與奥抄所引 重可尋

求矣

享保十一<sup>丙午</sup>年秋八月寫得<sup>了</sup>

寫手 惟圭卅九

秀円廿四

大徳山門之本直賜之雖然彼本蠹損誤不少重<sup>テ</sup>得善  
本校訂<sup>セ</sup>焉

惟圭・秀円による享保十一年書写の奥書を持つものが数本ある。

ここでは、龍谷大学附属図書館蔵本を挙げたが、例として一本を挙げたものである。そのため惟圭・秀円の直筆であるとか、代表的な写本であるとかという意味ではない。惟圭・秀円の奥書を持つ各諸本の先後関係については確認していない。なお、巻頭に「惟圭私考」として「秘蔵記果抄本云々」という文が加えられているものが多いが、この部分を略するものもある。

なお、奥書末尾に「山門之本」で「彼本蠹損」とある。A本の叡山文庫(真如蔵)蔵本も「蠹損」甚だしい本である。あるいは、この「山門之本」とは、叡山文庫(真如蔵)蔵本を指すものかもしれない。

2 叡山文庫(池田史宗)蔵

縦 二七・四纏

横 一九・二纏

二五紙

外題 在唐記 覺大師御撰

内題 在唐記 天台沙門忠圓之

巻頭の「惟圭私考云々」なし。

(奥書)

(二五丁裏)

龍谷大学附属図書館蔵本と同文。

ただし、「山門某院」の右に朱で「禪定院歟」と記す。

3 日本大学蔵

縦 二六・九糎

横 一八・九糎

二四紙

外題 在唐記 慈覺大師

内題 在唐記 慈覺大師

(表紙裏)

「昭和三二年四月一三日一誠堂購入」の印。

(二丁表)

右下に「黒川真道蔵書」の朱印。

(二丁裏)

本書首章欠失せるは惜むへし又別本三卷本ありといへとも所見なしと上杉文秀氏の語られたりときけり(朱筆)

(二丁裏)

「惟圭私考云々」と龍谷大学附属図書館蔵本と同文。

(奥書)

(二四丁裏)

龍谷大学附属図書館蔵本と同文。

ただし、「山門某院」の右に朱で「禪定院歟」と記す。

4 大谷大学蔵

縦 二七・二糎

横 一八・五糎

二六紙

外題 在唐記 慈覺大師 完

内題 在唐記 慈覺大師

(二丁表)

「惟圭私考云々」と龍谷大学附属図書館蔵本と同文。

(奥書)

(二五丁裏)

龍谷大学附属図書館蔵本と同文。

(二六丁裏)

明治四十一年六月御橋惠言氏之手を経て黒川真道氏之蔵本を借得者謄写せしめたる者也 真宗大學図書館

5 温泉寺(兵庫県城崎市)蔵

縦 二二・二糎

横 一五・七糎

(マイクロフィルムからの紙焼きを使用。大きさは紙焼き中のメジャーからの推定。)

二四紙

外題 在唐記

内題 在唐記

慈覺

巻頭の「惟圭私考云々」なし。

(奥書)

(裏表紙裏)

寶巖大徳云此本從山門某院來与奥抄所引在唐記異重

可尋求矣

享保十一丙午年秋八月寫得了 惟圭三九

聖教目録出多本可得覽

大徳山門之本直賜之雖然彼本蠹損誤不少重得善本校訂焉

享保十六年歲次辛亥春三月命十三沙弥等慧令寫之畢 曇寂

元文二丁巳年冬十月二日以曇寂之御本書寫之畢 温泉寺沙門

祐淳

6 駒澤大学(永平寺寄託)本

縦 二七・〇糎

横 一九・二糎

二五紙

外題 在唐記 覺大師

内題 在唐記 慈覺大師

(二丁裏)

「惟圭私考」と龍谷大学附属図書館蔵本と同文。

(奥書)

(二五丁裏)

龍谷大学附属図書館蔵本と同文。

ただし、「山門某院」の右に朱で「禪定院歟」と記す。

末尾に、

安政二年乙卯冬十一月写之了 行阿日賢 五十二  
を追加する。

C本

1 叡山文庫(吉祥院)蔵

縦 二七・〇糎

横 一九・三糎

仮綴

表紙とも二六紙

外題 在唐記 慈覺大師記

内題 在唐記 慈覺

(奥書)

(二五丁裏)

大治元年十月中旬之比詔筆者以三昧阿闍梨御

本書之  
同二年正月五日校了

金剛佛子良

表紙とも二十六紙  
外題 在唐記 慈覺大師記  
内題 在唐記 慈覺

全  
寶曆八龍集寅歲二月十三日夜校写江州延曆寺東塔南溪吉祥院請以

本更校

天台山除鐘男般若金剛実靈

D本

(奥書)  
(二五丁裏(丁数は『在唐記』部分のみで数えた。))  
叡山文庫(吉祥院)蔵と同じ。

2 宮内庁書陵部蔵

縦 二七・〇糎

横 一九・九糎

仮綴

表紙とも二十六紙

外題 在唐記 全

内題 在唐記 慈覺

叡山文庫(無動寺)蔵

縦 二七・一糎

横 一九・三糎

二六紙

外題 在唐記 慈覺大師

内題 在唐記 慈覺

(奥書)

(二五丁裏)

叡山文庫(吉祥院)蔵と同じ。

(奥書)

(二五丁表)  
元文三年戊午年八月書寫了 自在金剛韶眞

(二六丁表)

安永六年丁酉季十二月以東叡眞如本令書

写之了

文化三年九月以明德院慧航之本令書写之了

求法沙門慧航

護法金剛眞超

3 無窮会蔵

『玉籠』第百八十三卷 『池底叢書京城圖』等と合写。

縦 三三・〇糎

横 一四・〇糎



『国書総目録』では、円珍の『在唐記』として、「明德院無動寺（巻上、文化三年真超写）」とするが、叡山文庫の目録カードには見えない。この円仁『在唐記』を誤ったものか。

E本

叡山文庫（生源寺）蔵

縦 二六・七糎

横 一九・四糎

二一紙（うち末三紙は安然真筆として『在唐記』末に追加。）

外題 慈覺大師在唐訣 一卷

内題 慈覺大師在唐訣 深秘

（奥書）

（一一八丁表）

享保十八年癸丑十二月十三日

如鑑

妙巖亮範

東寺演奥抄中引云慈覺在唐記ノ文辞全ク同於此書ニ矣

但此ノ書中注シテ云已上證供奉或ハ智證在唐記モ亦未可知ル

也而此ノ書多是建立護摩軌之秘訣而實ニ髻中ノ明珠者

也今私ニ加フ校點ヲ後賢者宜知此意云

寛政七年二月十七日 亮雄敬記

同九年丁巳十一月朔日書寫 阿闍梨真僞

文久三年歲在癸亥六月廿八日 夜剪二更々燈令書寫畢偏

為令法久住利益有情也 延曆寺道場持念沙門亮海敬記

（中略）

（一一八丁裏）

右一卷者吾祖慈覺大師在シテ於大唐ニ所ノ記ノ秘訣ヲ而末字相承

以ニ為笈中ノ秘書ト然而書中注シテ證供奉ト先輩花山ノ雄公

曰或ハ智證在唐記モ亦未可知也ト今謂フ似此說未ルニ盡所以者何ナル此

書

多ハ是レ建立Dharma軌ノ之秘訣也如彼軌ノ者法全和尚撰集而大師

録外ノ將來而軌中ノ深義稍難通曉シ者親ク諮詢彼門下ニ者則

師資之常軌況ヤ乎傳法大阿闍梨ヲヤ乎何為僅ニ以有ルラ證供奉三字輒

是レ付於智證ノ所訣ニ可ナシ哉レ此則所以余カ云未盡ト意ニ在于斯矣

偶々如有ルカ

今注ノ三字者後人誤加可將書字展轉歟スルカ不可得知也遂寫功之

日聊カ記シテ片言ヲ俟來者ノ是正云尔

癸亥六月廿九日 金剛佛子亮海再記

（一一一丁裏）

于時安政六年己未二月廿日依慈念院慈純闍梨秘藏

安然和尚真筆之御本謹遂寫功畢

台山領淨泉沙門癸生介亮通記

文久三年歲在癸亥六月廿九日右御本奉書寫畢

和尚親書第二轉窠希世之珍本也可秘重六賢

西塔院沙門金剛佛子亮海記

時歲廿九

F本

京都大学蔵

縦 二四・二糎

横 一六・四糎

仮綴

二三紙

『日本大藏經』の原稿であろう。墨筆で『在唐記』本文を写し、朱筆で訓点および印刷用の指示を記入する。奥書は各『在唐記』の奥書を貼りあわせてある。そのため、本文が何によったのかは明確ではない。なお、一紙目に「中野達慧寄贈」の印がある。

題名として、最初の行に墨筆で「在唐記」と記してある。ただし、「記」を朱筆で「決」に訂正する。なお、印刷時にこの「決」は、「決」となる。「記」を朱筆で「決」に変更した理由については不明である。『日本大藏經』の同じ巻に円珍の『在唐記』が含まれており、同名を避けるための変更であろうか。また、印刷時に「決」が「決」と変更された理由も不明である。単に活字の問題であろうか。『国書総目録』では、『在唐記』の別名を『在唐決』とする。おそらく、『日本大藏經』に従ったものであろう。別名としては現在確認できるのは、前述の叡山文庫（生源寺）蔵の『在唐決』だけである。

G本

青蓮院吉水蔵蔵

『国書総目録』によれば、青蓮院吉水蔵に円仁の『在唐記』（平安末期写一帖）および円珍の『在唐記』（大治元奥書、一帖）が現存するかのようである。今回は調査できなかったものの、『青蓮院門跡吉水蔵聖教目録』（汲古書院、一九九九年）には『在唐記』の記載がある。形状等を、青蓮院門跡吉水蔵聖教目録より引用する。

## 第七箱

## 9 在唐記

平安時代後期寫、粘葉裝、楮交り斐紙、縦二五・〇糎、横一四・六糎、一〇七紙、押界七行、界高一九・八糎、界幅一・七糎、薄茶地原表紙、朱點（假名、句切點、返點、平安後期）、朱書訂正・書入・拘點・校合、墨書校合、内題

・尾題ナシ

(表紙) (右上) 虚心記 (右下) (左下)

(扉紙) 胎藏在唐記師云虚心記（實助）本在之

(外題) 『胎藏』 / 在唐記

(奥書) 金剛弟子觀尊之本

(後筆) 「傳領了實助之」

『青蓮院門跡吉水蔵聖教目録』に記載された『在唐記』はこれのみである。「平安時代後期寫」とあることは、『国書総目録』の「平安末期写」と一致する。しかし、表紙等に「円仁」「慈覺大師」の記載が全くない。また、『虚心記』という題名についても不審である。

また、前述のように、円仁『在唐記』の中間部は字母釈であり、

後半部では、「阿字」に関する惟謹の説等を述べている。そのため、内題に「後筆朱書」で特に『胎藏』と追加されたという点からは、円仁『在唐記』の前半部を指していると考えられないだろうか。すなわち、現在の円珍『大師在唐時記』と考えるべきかもしれない。これについては、今後の調査を期したい。

また、『国書総目録』では、青蓮院吉水蔵として円珍の『在唐記』(大治元奥書、一帖)をあげる。C本としてあげた叡山文庫(吉祥院)蔵等に現存する円仁『在唐記』には、「大治元年十月中旬之比、詔筆者以三昧阿闍梨御本書之」という奥書がある。あるいは、これを誤ったものであるうか。とすれば、円珍の『在唐記』ではなく、円仁の『在唐記』であろう。あるいは、同じく大治元年に写された円珍の『在唐記』が存在するのであるうか。『青蓮院門跡吉水藏聖教目録』にはその記載はなく、所在等については不明である。

### 三 まとめ

以上、円仁『在唐記』の諸本を調査した結果、次のような点が明らかになった。

一 平安末期写の叡山文庫(真如蔵)蔵本も、現在の円仁『在唐記』と同様に前半部、中間部、後半部の三つの異なった内容を合わせたものであること。

二 円仁『在唐記』の中間部の字母釈以外は、円仁の著述であること。この確実な証拠はないこと。

三 円仁『在唐記』の別名としては、叡山文庫(生源寺)蔵本の『在唐訣』のみしか確認できなかったこと。